

## 少女の瞳に教えられて

富山市立南部中学校 三年 馬場梨彩子

「私はどうしてしまったのだろうか…」

心の中で自分に問いかけた。

テレビで、ある化学メーカーが自社の浄化剤をバングラディッシュに広めるとい  
うプロジェクトをしていた。汚れた水を飲み、マラリアなどで命を落とす人々を  
減らすために、その会社の会長は、自ら浄化剤の使い方方を村の人たちに教えてい  
た。泥々の湖の水も、一粒入れるとあっという間に透明になる様子は衝撃的で、  
私は、その会長の精神と行動力に、心から尊敬した。でも、その時点で私にはま

だ、他人事だった。遠い国の話、という意識が自分の中にあっただのだ。

その後、彼は他の村を訪れて十三歳の少女に出会った。その少女は、昨年の子イクロンで母と弟を亡くし、今は父と姉の三人で暮らしている。家から二キロ離れた井戸へ飲用水を汲みに行くのが彼女の仕事だ。その大変さを話す時も、母と弟のお墓の前でその悲しみを話す時も、目も動かさず無表情な顔からは、生きる希望も意味も感じる事ができないのだ。その時、私は思い出した。そうだ、小学生の時にアフガニスタンの少女が主人公のノンフィクションを読んだ時の気持ちだ。父が無実の罪で投獄され、幼い兄弟たちのために男の子に変装して外で働くという内容はショックで、「なぜ戦争が起きるのか？どうして世界中の人が平等に幸せになれるのか？どうすれば自分は少しでも役に立てるのか？」と真剣に考えた。そして「三つの願い、私だったら…」という詩に「世界中が平和になり、病気の人が治って、みんなが幸せになれるように」と書いた。その気持ちは今も変わっていないはずなのに…。

最近の私は、毎日が本当に忙しい。人は、時間に余裕がなくなると周りを見渡す心もなくなるのか。私の心の中は、いつしか自分のことでいっぱいになってしまっていたのだ。「これが終わったら次は…」とやらなくてはいけないことに振

りまわされて、小学生の時感じていた「広い視野で見る心の目」は、奥に追いやられてしまったのだ。それをテレビの中の少女は気付かせてくれた。

一粒の錠剤で泥水が澄んでいく様子を見ている少女の目に、人間らしい輝きが戻ってきた。そして、そのうれしそうな目が私に教えてくれた。今は何もできないかもしれない。でも、世界では、戦争や災害で困っている人々がいることを心の中に常に置き、何かできることはないかと心がけることはできる。そして、いつの日か、自分の力が少しでも役に立てば、と改めて思った。

自分が変わってしまったのではないかとあせり、思わず「私はどうしてしまったのだろうか？」と問いかけたけど、自分を見つめ直すことによって確信することができた。この気持ち大切にしていきたい。